

国内研修成果報告書

研修先:香川県小豆郡小豆島町

日程:2018年8月6日～8月10日

【研修内容】

- ・ 町内の児童館における子どもたちへの学習支援や交流
- ・ 島内で活動されている福祉事業関係者（特別支援学級の介護員や社会福祉協議会）との意見交換
- ・ 現地視察

【小豆島が抱える問題と対策】

- ・ 高齢化

小豆島の高齢化率は2015年のデータによると、41.3%で東京都の高齢化率は22.7%である。総人口の約3分の2が高齢者ということになる。

（地域医療情報システム <http://jmap.jp/cities/detail/city/37324>）

- ・ 障害者率

全国の障害者率は2017年度のデータによると、6.7%のところを小豆島町においては7.4%とやや高めである。

（小豆島町ホームページ www.town.shodoshima.lg.jp）

- ・ 部落差別

「部落差別の解消の推進に関する法律」が平成28年12月9日に成立し、同16日に公布・施行されました。この法律は、現在に至ってもなお部落差別が存在し、かつインターネットなど情報化が進展する中で、部落差別が新たな状況にあることを踏まえ、部落差別のない社会を実現することを目的として施行されました。また、基本理念について定めた上で、国や地方公共団体の責務や相談体制の充実、教育や啓発についての規定を設け、それぞれの役割分担を踏まえて、実情に応じた施策を講ずるよう努めるものとしています。差別や偏見のない、お互いの人権が尊重される地域社会の実現にむけ、町においても各種の人権・同和施策を総合的かつ計画的に推進してまいります。（土庄町ホームページ <http://www.town.tonosho.kagawa.jp/tns/info4050.html>）

島内では今でも根強く部落差別が残る地域がある。

- ・ 貧困問題

閉鎖的な島内のコミュニティ特有の問題として挙げられるのが、周りの目を気にして支援を受けることに否定的な人が多いという点だ。狭い島内では、噂は一瞬で広まるそうだ。だから家の前によく同じ車が止まっている様子を見られればすぐに、フードドライブの支援

を受けている家庭なのだとは島内で広まってしまふ。近隣同士の繋がりが薄い都会との大きな違いである。

このように、さまざまな問題を抱える小豆島では『香川おもいやりネットワーク事業』に参画する形で支援を進めている。

* 香川おもいやりネットワーク事業

平成 27 年 4 月から香川県内の社会福祉法人施設や社協、民生委員・児童委員をはじめ関係機関・団体が協働し、「生活のしづらさ」を抱え支援を必要とする方をトータルで支える仕組みづくりをめざして、「香川おもいやりネットワーク事業」を実施することになりました。

「香川おもいやりネットワーク事業」は、社会福祉法人（社会福祉法人施設と市町社会福祉協議会）が中心となり民生委員・児童委員をはじめ地域の福祉関係者と連携して、さまざまな原因で生活に困っている方（生活のしづらさを抱えている方）たちに寄り添いながら、訪問・相談等の支援活動等を通じ、誰もが住み慣れた地域で、人と人がつながる中で、その人らしく自立した生活を送ることができる「ふだんの暮らし」を、地域の中でつくっていく取組みを進めていきます。（社会福祉法人香川県社会福祉協議会ホームページ

<http://www.kagawaken-shakyo.or.jp/omoiyari/>より）

→香川県全体のネットワークだと、島と県との間で情報のすれ違いやタイミングのずれが応じることがある。そのような例として、フードドライブに関する事案が社会福祉協議会の方との意見交換の際に出た。島の住民がフードバンクを依頼し県が動いたにも関わらず、島内にその情報は届いておらず、必要な人の元に届かなかったそう。そして余った食料は破棄されたものもあるという。

【行ってみてわかったこと】

今回受け入れていただいた児童館は部落地域にあり、海がすぐそばの小規模な児童館だ。小学 1 年生から中学生が利用している。島の家庭では、長期休みには親が仕事でほとんどいないことが多い。そのため、子どもが 1 人で家に残るといった状態も少なくない。そのような子どもの居場所を作る役割を担っているのが児童館だ。その児童館には職員が 1 人と、よく様子を見に来ては子どもたちの遊び相手になってくれる 60 代ぐらいの男性がいる。子どもの数は、私が伺った三日間は 10 人ほどだった。

・勉強をする姿勢について

夏休みの場合、児童館に来たらまずは勉強をするルールがある。机の上に夏休みの宿題を取り出すものの、子どもたちはほとんどやらずに遊び始めてしまうと職員さんがおっしゃっていた。しかしそのことについて怒ることはせず、遊ばせてあげるのが児童館の方針だという。児童館に来る子どもの中には、家庭に 1 人でいる時間が多く、親にわがままを言えずにストレスがたまっている子どももいるという。そんな子どもたちにとって、児童館は安心して過ごせる場所になれば、という。実際に夏休みの宿題をやろうと声をかけてみたところ、

30分ほど経つと集中力が切れてしまったのか、遊ぼうと言い始めた。一方で、何人かは夏休みの宿題を終わらせたいと頑張っている様子もあった。学生が2人いたので、1人が勉強を見てもう1人が遊び相手になる形となった。勉強をしている子どもの近くで、他の子が遊び始めてしまうのは勉強をする空間としては好ましくない。勉強する姿勢は、小学生のうちに身につけておくべき最低限のスキルだと私は考える。家庭では見ることができない環境にある分、児童館ではもう少し勉強の時間と遊びの時間にメリハリを付けるべきだ。私は福島県伊達市の児童館にも伺ったことがある。そこでは、児童館に来たらまずは勉強の時間があり、決められた時間までは遊んではいけない。決して長い勉強時間ではないが、メリハリを付ける習慣を作ることは大事だ。

・学習支援

小学校の勉強で遅れを取ってしまうと、その後追いつくことが難しい。特に算数は、1度遅れてしまうと取り返しがつかないこともある。

今回のように、大学生が長期休みを利用して教える形では、一時的な支援にしかならない。日々の勉強を見る人材が必要である。たとえば島内の中高生が月に1回~2回程、勉強会を開くことができれば良いのではないだろうか。大学生も月に一度、児童館を訪問し勉強会に参加することが理想ではある。

・若者支援

上記で提案したような勉強会に大学生が参加した際には、中高生に対して大学や仕事などの将来について話す機会があっても良いのではと思う。島内には就職先が少なく、専門学校や大学進学のためには島を出ざるを得ない。義務教育後の進路に困り、ニートや引きこもりとなる若者も少なくない。将来の選択肢を広げるという意味でアドバイスができれば良いのではと考える。進路選択に正解はない。ひとりひとりの好きなことや得意なことに目を向けて、個性を生かした進路選択をできるようにサポートしたい。

【感想】

私は今、ゼミで児童福祉を学んでいる。現代福祉学部を志望した理由も、主に児童福祉について興味があったことだった。今まで、貧困や発達障害といった状況に置かれた子どもと実際に関わることはほとんどなかった。今回は、それらの問題を直に感じる事ができた。特に関心のあった、児童の貧困と発達障害のそれぞれについて考えることにした。

子育てにかかる時間よりも仕事の時間の方が長くなってしまったり、母親が仕事から帰ってきて疲労によりすぐ寝てしまうことなどによって、子どもはストレスを感じる場合がある。家庭内では空気を読んで良い子を装うが、児童館では縛るものがないために反動で自己中心的になってしまう場合があることが見ていて分かった。家庭と小学校と児童館が、その子どもにとっては社会のすべてのように見えた。島内どころか、更に狭い世界しか知らない。その一方で、話す機会のあった高校生は島から出て、大学に進学すると言っていた。子

どもの経済的な状況は性格や生き方にも関わってくるように思える。

発達障害は一括りにできるものではなく、さまざまな種類に分かれている場合や、いくつかの種類が重なり合っている場合もある。障害についての理解が浅い人も島内には少なくない。その影響があつてか、障害のある子どもに対して放置気味な親も島内では少なくない。また、島内はとにかくコミュニティが狭い。噂も情報もすぐに回ってくるという。だから、障害があることや貧困であることは、すぐに周りに知られてしまうし、支援を受けている立場であることもすぐに分かってしまうそう。都会では近隣同士の付き合いがほとんどないということも少なくない。地域の繋がりが薄くなっていることが問題になる場合もあれば、メリットとなる場合もあるのだと感じた。一方で、島内のネットワークを生かし切れていない場面も見られた。社会福祉協議会の方との意見交換の際に、社協と現場との連携が取れていない状況に驚いた。島内の小規模な支援体制でさえも、社協と現場との連携が取れていないのだから、都会の支援体制では更に社協と現場とのギャップは強いのだろう。島だから仕方がない、という考えの大人が多くいたことが印象的だ。抱える問題や背景、資源は都会とは違う。しかし住んでいる土地の習慣や考えは、それらの問題を放置して良い理由にはならない。部落問題に関して高校生は楽観的で、良い意味でどうでも良いことと考えるように見えた。古い考えに縛られ、それこそ生涯に渡って小豆島に住み続けているような世代を変えていくのは難しい。次の世代を担う子どもたちにもっと目を向けるべきだ。子どもが子どもらしく、個性を尊重し周りの大人に左右されないような環境にしていくためにできること。狭いコミュニティで決まった人間関係の中を生きる子どもにとって、ちょうど良い距離感の人間はあまりいない。誰かが誰かの親戚や友達であることがほとんどで、そのつながりも強い。島との関わりが浅い立場だからできることがあるはずだ。今後も小豆島を訪れたいと思っている。自分にできることは小さなことで、大きな結果を残せることではないが、大学生との関わりの中で子どもが何でも良いから感じてくれて、いつかふと思い出してくれるような経験になってくれたら嬉しい。広い視野でものごとを考えられるようになるためには、たくさんの人に出会う経験が1番だと思う。私個人との関わりだけでなく、これから多くの学生と小豆島の子どもたちが関わる機会を作りたい。